

## 地震体験・消火体験・暴風体験を通じて、 感じたこと。

- ・起震装置による地震体験：想像していた以上の揺れを感じた。  
タンスなどの転倒防止対策をしておくべきだと思った。
- ・消火体験：慌てなければ無事に消火器で初期消火ができる。  
消火器の扱い方を体験したので、いざというときに使えるであろうと思った。
- ・暴風体験：自然には逆らえず、恐怖を感じた。

## 避難所開設訓練を通じて、感じたこと。

- 迅速かつ丁寧に段ボールベットや段ボールプライベート空間の組み立てにてこずった。  
↓  
多数の方々と協力して組み立てる必要がある。  
↓  
組立後は、居心地の良い空間・寝やすいベットで快適に避難生活が過ごせると思った。



## 避難所開設訓練

- ・段ボールプライベート空間組み立て
- ・段ボールベット組み立て



## 自衛隊による ライフハック 実習

- ・ビニールシートと  
段ボールにて寝袋  
作成
- ・毛布と木材で担架  
作成



## 自衛隊によるライフハック実習で、感じ たこと。

身近なもので様々な代用品が作れることを学んだ。

- ・懐中電灯とペットボトルでランタン
- ・缶詰をアスファルトに擦って開ける方法
- ・ビニール袋で濡らしたくないものの保管方法

その他

大災害に備えて、就寝時には枕元に靴を置いておく



### 講義 消防団活動の概要 について

- ・ 防災で一番身近な存在  
は消防団！

## 消防団活動についての 講義を聴講して、感じ たこと。

- ・ 消防団はボランティア
- ・ 特別地方公務員（非常勤）
- ・ 生業家を中心
- ・ 地域密着
- ・ 自分の街は自分で守る
- ・ 団員数が減少傾向

「我々も入団して、地域  
の皆さんの役に立ちたい」



## 全体を通しての感想

1. 災害の恐ろしさ
  - ・ 災害は様々なものがある
  - ・ 災害はいつ起こるかわからない
2. 災害対策
  - ・ 普段からの災害対策
  - ・ 災害発生したら
3. 災害時はみんなで協力
  - ・ 自衛隊、警察、消防、消防団などの公共機関と民間との協力

自転車ヘルメット着用推進校実施報告書

学校名	埼玉県立杉戸農業高等学校
生徒数及び職員数	生徒数 622人 職員数 89人
取組の概要	<p>1 交通安全にかかわる学校の概要          本校周辺には、畑などが多く、歩行者道が狭い。生徒は自宅から学校まで自転車を利用している、駅から学校まで自転車を利用しているなど合わせて自転車利用が9割である。          昨年度からヘルメット着用について杉戸警察署と連携した啓発活動を行っているが、着用率は3割程度と低い状況である。</p> <p>2 交通安全に関する取組・実践          (1)本校の取組          ア 交通安全運動(4月、9月)          イ 自転車点検(4月、12月)          ウ 1年生自転車安全運転講習会(4月)          エ 交通安全教室(3月)</p> <p>(2)自転車ヘルメット着用推進校としての取組          ア ヘルメットの着用啓発活動          希望生徒へのヘルメットの配布・着用推進</p> <p>イ スケアード・ストレイト教育技法による自転車交通安全教室          模擬交通事故の実演をとおして、交通事故の危険さを視覚的に理解</p> <p>ウ 自転車安全運転推進講習会参加者による伝達講習会          自転車安全運転推進講習会参加生徒による伝達講習会を実施</p> <p>3 成果と課題          自転車ヘルメット着用推進校としての取組を通して、交通ルールの知識を深めるとともにヘルメット着用の必要性や有効性についての意識は向上している。ヘルメット着用者は少しずつ増加傾向にあるが、今後ますます着用率が向上するよう声かけや講習会を通して、意識啓発に努めていく。</p> 

## 自転車ヘルメット着用推進校実施報告書

学校名	埼玉県立川越初雁高等学校
生徒数及び職員数	生徒数 514 人 職員数 51 人
取組の概要	<p>1 交通安全にかかわる学校の概要</p> <p>本校は住宅街に位置しており、道路の道幅も狭く、車や自転車の往来も多いため登下校には注意を要する。公共交通機関の便も悪く、全校生徒の74.9%が自転車を利用している。また、近くには、小学校や中学校もあり、常に交通事故の危険性が潜んでいる。生徒指導部を中心に、日頃から自転車での交通ルールやマナー指導を行っている。</p> <p>今年度の自転車乗車中での車での接触や自転車同士での接触等、報告のあった事故件数は9件と、幸い重大事故にはなっていないが多発している。</p> <p>本校の自転車のヘルメット着用率は、7月段階で12.9%と低い状況である。県から整備されたヘルメットの着用を呼び掛けているが、着用率の向上には至っていない。</p> <p>2 交通安全に関する取組・実践</p> <p>(1) 本校独自で実施している取組</p> <p>ア 校門での登校指導・下校指導</p> <p>イ 交通安全講話</p> <p>ウ 自転車点検</p> <p>エ 川越警察署と連携した交通安全指導</p> <p>(2) 推進校・地域と連携した取組</p> <p>ア 川越警察署による自転車運転シミュレーター</p> <p>実施日 9月6日</p> <p>内 容 シミュレーターを使用した自転車交通安全運転体験</p> <p>イ スケアード・ストレイト教育技法による自転車交通安全教育</p> <p>実施日 9月25日</p> <p>内 容 模擬交通事故の実演</p> <p>ウ 高校生の自転車安全運転伝達講習会</p> <p>実施日 9月25日</p> <p>内 容 スケアード・ストレイト教育技法の実演後、自転車安全運転推進講習会参加生徒による伝達講習会</p> <p>3 成果と課題</p> <p>自転車ヘルメット着用推進校としての取組を通して、ヘルメット着用の必要性及び有効性について意識は向上している。しかしながら、必要性や有効性について意識はしているものの、周りが着用していない、髪型が崩れるなどの理由で着用に抵抗を感じている生徒は63.8%いる。今後は、学校全体で着用することへの抵抗感を軽減できる環境づくりに向け、保護者及び地域とより一層連携し、生徒の交通事故がなくなるよう取り組んでいく。</p> <div data-bbox="991 607 1177 869"> </div> <div data-bbox="1214 607 1433 869"> </div> <div data-bbox="991 882 1433 1189"> </div> <div data-bbox="991 1205 1433 1429"> </div>

## 自転車ヘルメット着用推進校実施報告書

学校名	埼玉県立岩槻高等学校
生徒数及び職員数	生徒数 938人 職員数 80人
取組の概要	<p>1 交通安全にかかわる学校の概要</p> <p>本校は、岩槻駅から歩いて登校する生徒が約56%、自転車で登校している生徒は、約40%である。近くに交通量の多い16号線があり、朝の登校時間帯は、横断してくる生徒、自転車で登校する生徒、車で通勤する人で入り混ざり、いつ交通事故が起こるとも限らないと感じつつ、日頃から自転車での交通ルールや、マナー指導を行っている。今年度は、接触等の報告は多少あるが、幸い重大事故は起きていない。</p> <p>2 交通安全に関する取組・実践</p> <p>(1)</p> <p>ア 登校指導 正門・職員通用門・生徒用昇降口・岩槻駅迄の2か所 (教員が分担して毎朝声掛け指導)</p> <p>イ 一斉登校指導 各学期の始めに生活委員と行う (整容指導・挨拶運動)</p> <p>ウ 自転車点検 1学期(ライト・ブレーキ・ベル・反射板・ステッカー・鍵の確認)</p> <p>エ 下校指導 6月、12月に生活委員と行う (整容指導・挨拶運動)</p> <p>(2) 自転車ヘルメット着用推進校としての取り組み</p> <p>ア スケアードストレイトの実施 9月11日 (1, 3年生に実施。2年生修学旅行中)</p> <p>イ ヘルメットの着用啓発活動 (支給されたヘルメットを配布・着用啓発)</p> <p>3 成果と課題</p> <p>・ヘルメット着用推進校としての取り組みにより、ヘルメット着用の必要性及び有効性についての意識は向上したが、まだまだ着用率は上げられていない。今後は生徒会等からの呼びかけ、保護者と協力しながら粘り強く指導していく必要があり、警察等の関係機関との連携した取り組みが必要である。</p>

## 自転車ヘルメット着用推進校実施報告書

学校名	埼玉県立熊谷西高等学校
生徒数及び職員数	生徒数 946 人 職員数 90 人
取組の概要	<p>1 交通安全にかかわる学校の概要        本校は、JR 高崎線と秩父鉄道に挟まれた場所に立地しており、登下校の際には、約7割の多くの生徒が電車を利用している。自転車を利用している生徒は約3割に当たる300人であった。        生徒に対する調査の結果、「自転車乗車時のヘルメットの必要性は理解しており、ヘルメットを持ってはいるが、着用には抵抗がある。」という生徒が多いことがわかった。着用については、「髪型が崩れることは気になりますか？」という問いに対して「気になる」と回答した生徒が約7割であった。</p> <p>2 交通安全に関する取組・実践        自転車ヘルメット着用推進校・自転車マナーアップ推進校として</p> <p>(1) 自転車ヘルメット貸出式        自転車ヘルメットの着用推進委員の生徒に対し、自転車ヘルメットを貸与。  </p> <p>(2) 交通安全教室        &lt;スケアード・ストレイト教育技法を用いた模擬交通事故見学&gt;        PTAとの共催で開催。        雨天により体育館での実施。  </p> <p>(3) 高校生による自転車安全運転推進に関する討論会        埼玉県教育委員会と埼玉県警察が主催する討論会に参加。        他校の高校生と意見交換を実施。      </p> <p>(4) 自転車の安全利用に向けた啓発動画の作成        自転車安全利用に関わる啓発動画を作成。  </p> <p>(5) 熊谷警察との連携        本校正門脇の北側フェンスに掲示している横断幕を新調。  </p> <p>3 成果と課題        生徒の主体的な活動を通じて、生徒自身が安全の大切さを学ぶことができ、自転車の安全利用に係る意識の向上を図ることができた。今後は、交通安全について、生徒とともに地域へも働きかけていきたいと考えている。</p>

## 背景・課題

平成24年4月1日施行の「埼玉県自転車交通安全利用の促進に関する条例」を受け、自転車事故件数の多い高校生に対して、法令の遵守と自転車の安全利用に関する交通安全教育を推進するため、地区別の推進講習会を開催する。

また、本講習を受講した高校生が中心となり、自転車に対して交通安全利用に関する伝達講習会を実施することにより、県内高校生全体の交通安全意識の向上を図る。

## 事業内容

- (1) 講義①②(40分)
  - ① 自転車交通事故の現状 (県警察本部交通部交通総務課)
  - ② 自転車安全利用五則について (県民生活部防犯・交通安全課)
- (2) スケアード・ストリート教育技法による自転車安全教育 (50分)
- (3) 生徒同士の意見交換 (15分)
  - ・各校での自転車安全教育の状況など
- (4) 講義③④(20分)
  - ③ 自転車の安全な利用について (東京海上日動火災保険株式会社)
  - ④ 伝達講習会について (教育局保健体育課)
- (5) 特定小型原付自転車試乗体験 (※16歳以上、希望者のみ)

全体を通じて…

最新の道路交通法  
自転車ヘルメットの着用  
加害事故を起こした際の責任 など

受講した各校の代表生徒は、  
学校に戻り、自身が講師となって伝達講習会を行う。

## 開催結果

開催日	地区	会場	参加者
令和7年7月28日(月)	南東部	東武こしがや自動車教習所	生徒 71名 教員 42名
令和7年7月31日(木)	北東・南西部	県立総合教育センター	生徒 85名 教員 44名
令和7年8月4日(月)	南西部	セイコーモータースクール	生徒 79名 教員 47名
計			生徒235名 教員133名

9:00	9:30	9:40	10:20	11:20	11:35	12:00	12:20
受付	開講式	講義①②	スケアード・ストリート教育技法	休憩	意見交換	閉講式	特定小型原付試乗体験(※)



スタントマンによる  
交通事故再現

生徒同士による  
意見交換

特定小型原付  
試乗体験

## 探究型訓練で育む 新しい時代の資質・能力

慶應義塾大学 湘南藤沢キャンパス  
環境情報学部 准教授 大木聖子

### 今日お伝えしたいこと

- より実践的・現実的な訓練とはどのようなものか
  - それはどのように学校に導入できるのか
- 学校の訓練は教育課程に位置づいている
- 訓練(防災)を通して、子供たちにとどのような資質・能力を身につけてほしいのか
  - 訓練(防災)を通して、子供たちは何ができるようになるのか・なにを学ぶのか

### 教職員へのアンケート調査の結果

- 現状の訓練でいいのか疑問に感じている
  - 雨天順延でいいのか？
  - 何事もなく廊下に並んで、整然と校庭に行けるのか？
  - 本場の災害時にどうだったのか知りたい
- 教職員間に温度差があり、訓練を改善できない
  - 「ずっとやってきた方法を変える必要があるのか」
  - 「めったに起きないものに時間を割くことはできない」
  - 「安全は自分の担当ではない.忙しい」

### 教職員への安全教育・子供たちへの安全教育

#### 平時に把握： 地域・施設・児童生徒の脆弱性

- ・地域： ハザードマップで確認
- ・施設： 接合部分・非構造部材の把握
- ・人間： 『発災時の児童生徒理解ワーク』

#### 発災時に必要な対処（← 事前に教職員研修）

- ・教室： けが人への対応
- ・本部： 判断と後方支援
- ・教室と本部をつなぐ情報伝達

#### 児童生徒への防災教育

- ・訓練をやる意義の理解, 何が起きるのかの理解
- ・『写真で危険探し』『地震シミュレーション』
- ・教室内待機の訓練, 余震・停電・けが人想定訓練

教職員が  
進める

子供達もできる  
ようにする

## 過去の大地震で起きたこと

- 余震・停電・避難経路の破損・傷病者
- 新耐震基準・耐震化した校舎の倒壊事例はゼロ
- 校庭集合できさない → 教室内待機の訓練が不可欠

## 8. 阪神・淡路大震災以降、起きていないこと

### ■ Is値 $\geq 0.7$ の学校校舎の崩壊は皆無 (通常住宅の1.25倍強い)

#### ■ 阪神・淡路大震災後、学校耐震化

- 公立小中学校の99.9%が完了 (2024年10月時点)
- 体育館の吊り天井落下防止 実施率: 99.6%

#### ■ 注意すべきところ:

- 渡り廊下等の接合部分 (エクスパンション・ジョイント)
- 非構造部材 (内壁・外壁・照明 ゴールポスト, 等)

©1978年宮城県沖地震災害調査報告

## 7. 能登半島地震 発生時の揺れ

- MBS News:
  - <https://youtu.be/6nar0ZwHrJc?si=kKVgFFGmSkmQo6BT>
  - <https://youtu.be/cmDGO2rPwPE?si=dAvzenCJTqOtNemo>
- ANN News:
  - <https://youtu.be/wYMJCernTOU?si=9poRXCNCiOMPIiEO>
  - <https://youtu.be/gJgpIQHQCVQ?si=wOkI7MBRrJLHXDmX>
- テレビNEWS:
  - [https://www.youtube.com/watch?v=f8qBm3-u\\_3o](https://www.youtube.com/watch?v=f8qBm3-u_3o)

歩行は不可能 / 立っていることすら困難 / 腰が抜け  
てすぐに立てない

## 9. 能登半島地震建築物被害調査等報告 (速報)

©国土技術政策総合研究所資料(2024)



写真 5.3.2-22 建築物 B-1 と B-3 の間の Exp. J. 写真 5.3.2-25 建築物 B-4 と別棟の間の Exp. J. の被害のずれ

## 校舎の構造的な弱点を把握しよう

- 耐震化された校舎が倒壊した事例はない
  - 渡り廊下や校舎同士の接合部分（エクスパンションジョイント）は損壊する恐れあり。渡り廊下の下を通るのは危険。



写真 5.3.2-36 建築物 C-3 と C-4 の間の Exp.J. の被害  
『能登半島地震建築物被害調査等報告（速報）』① 国土技術政策総合研究所資料（2024）



写真 5.4.2-38 仕物の傾斜による 2 階のエキスパンションジョイントの破損  
『能登半島地震建築物被害調査等報告（速報）』① 国土技術政策総合研究所資料（2024）

11

## 能登半島地震建築物被害調査等報告（速報）

© 国土技術政策総合研究所資料（2024）

- 地震のあと
  - 教室内や廊下にはガラスが散乱
  - 渡り廊下や接合部分はズレたり、破片が散らばったりする



写真 5.4.2-37 建物内部のガラスの散乱状況

内壁が剥がれる

ガラスが散乱

強化ガラス



12

## 能登半島地震建築物被害調査等報告（速報）

© 国土技術政策総合研究所資料（2024）



写真 5.6.2.(3)-5 校舎 3 階の ALC パネルによる外壁の脱落  
(WA-101：輪島市、教育施設)



写真 5.6.2.(3)-6 左写真の外壁から落下した ALC パネル  
(WA-101：輪島市教育施設)

## 学校管理下の発災で被災した教員の手記①

2011年3月11日 東日本大震災

（本震）

窓の外を見ると信号機や電柱がしなりながら大きく揺れているのが見え、事の重大さを認識。信号機のランプが消えて停電になったと思った。激しい揺れに泣き出す子が始まった。教室前方の棚の上に置いていた CD ラジカセが落下。プレハブ校舎が大きく揺れているのが見えた。屋上からはがれた鉄板が落ちてきた。水槽の水がこぼれ、荷物が床一面にちらばった。教室内は足の踏み場もないほど本プリントが散乱した。

揺れている時間が長く、泣き叫ぶ子供が続出した。「大丈夫」と何度も言った。

入口の窓から 3 階廊下を見たら、真っ白にほこりが立っている中、パソコン室あたりの天井が落ちて危険な状態になっている。指示、救助が来るまで音楽室にいたほうが安全だと思いどきどきした。

廊下、階段は真っ白にほこりが立っていた。余震の揺れが来る中での避難だったので滑って転ばないように指示した。どの学年の子も動揺して泣いて、大声で泣いている子もたくさんいた。

（保護者来校・避難者）

一部の一般の人たちが体育館軒下に避難しており、余震の時に目をやると体育館の窓が割れていたことに気づき、危険を感じる。

外の寒さがこたえてきて、5 年担任がジャンパーを取りに校舎に戻る。そのうち、「トイレに行きたい」と話す子が出てきた。

何回も余震があり、そのたびに子供たちは怖がる声を上げていた。呆然とする子、泣き叫ぶ子、さまたげだつた。他学年の先生方も 1 年生の相手をしてくださったが、全員には対応しきれなかった。

（校庭避難の指示）

© 『東日本大震災 教職員が語る 子どものいち・未来』(2012)

## 学校管理下の発災で被災した教員の手記②

2011年3月11日 東日本大震災

あ、地震だなどと思った次の瞬間、強烈な横揺れが始まった。子供たちはとっさに机の下に潜り込んだ。誰も声を出さなかったように記憶している。私は、すぐに収まると思ったので、「机の脚をしっかりとつかんで！大丈夫だから、すぐ収まるから！」と声を掛けて前と後ろの戸を開けて回った。

ところが、揺れはますます強く、体みなく教室を痛めつける。何かが割れる音がある、外窓のガラスが割れて落ちてきた。「おかさ～ん！」「こわいよー！」5年生といえども、あまりの揺れに恐怖でいっぱいだった。

子供たちの限界はとうに越えて、泣き出す子も増えていた。

©『東日本大震災 教職員が語る子どもいのちのち』未採(2012)

## 過去の災害で児童生徒に起きたこと（被災地教員手記より）

- 過去の被害地震から調査：
  - 恐怖で動けない / 避難途中に昇降口で失神
  - 腰が抜けて動けない教職員の発生
  - 校庭避難途中に転倒して骨折
  - 余震で悲鳴 / 余震で嘔吐 / 余震で校外に逃亡
  - 過呼吸 / 過呼吸が伝搬
  - 机に頭を激突 / 階段で転倒 / 階段での転倒者が他の人を巻き込み
  - 保護者と避難者が校庭に混在 / 校庭で転倒

## 学校管理下の発災で被災した教員の手記③

2016年10/21(金)14:07 鳥取県中部の地震

窓ガラスが割れたり、壁が落ちたりするような大きなダメージは認められなかったが、大きな揺れに生徒たちは恐怖心を抱き、パニック状態の生徒の姿も見られた。

地震直後は停電となり、校内放送が使用できなかつたため、ハンドマイクを利用して生徒の避難誘導を指示した。指示がなかなか行き届かず、教室内の教師の判断で避難を開始する場面もあった。その日は天候が良かったため、避難訓練通り生徒は外に避難することができたが、荒天時の避難について後日検討する必要があった。

余震が続いたため、なかなか校舎に入ることができず生徒たちの体も冷えてきて、トイレに行きたい生徒、体調に変化がみられる生徒がでてきた。体育館の安全を確認したのち、余震と余震の間を見極めながらクラス単位で、教室棟の荷物を取ったあと体育館に移動して保護者の迎えを待った。

©鳥取県(2016)『鳥取県中部地震記録誌』

## つまり、発災時に学校現場で困っていた内訳は、

- 訓練のように平然と校庭には行けなかつた
  - (一方で、机の下に入る、などはできていた)
- 余震の継続による悲鳴や嗚咽が大きく、指示が通らなかつた
- 停電で管理職の指示が来なかつた。つまり、組織の初動方針を全員が把握していなかつた / そもそも話し合えてなかつた
- けが人が出たこと・時間経過と共に体調不良者が出た
- 校舎が損壊したこと・教室内や廊下に落下物が散乱した
  - (一方で、倒壊はしていない)
- 保護者の引き取り作業や避難者の誘導が、随時の判断を遅らせたなど

## 地域・施設・人の脆弱性を把握しよう

### 地域の脆弱性

- ・津波・地すべり・液状化，等

### ハザードマップの確認

### 施設の脆弱性

### 校内図・目視による確認

- ・非構造部材（照明・ゴールポスト，等）
- ・建物接合部分（渡り廊下・つなぎ目，等）
- ・フロートガラス（額・戸棚ガラス，等）

### 児童生徒・教職員の脆弱性

### 校内研で情報共有

- ・泣き叫ぶ・脱走・過呼吸・パニック，等

## 自クラスの発災リスクは学級運営で最小化

### 起こりうること

1. 全員机の下には入れれると思うが，平時からハイリスクな女児Aは泣き叫ぶ
2. 揺れが収まったらAさんは私にしがみつき，私もAさんをトントントンしてなだめる
3. 自分もトントントンしてほしい児童が一気に机の下から出てきて，私は身動きが取れなくなる

### 対処方策

- ・Aさんが泣き叫ぶのはやむを得ないが，ほかの児童を自席にとどまらせることはできそう
- ・事前指導の「おかしも」を発展させて，「先生のクラスでは，机の下から小さな声で励ましあうのはOKとします。『大丈夫だよ』『がんばろう』と声を掛け合いましょう」と伝えてみる

## G. 『発災時の児童生徒理解ワーク』

### 自クラスでは何が起こる？

新学期最初の週の朝の会をイメージしてください。

その最中に，震度6強の強い揺れが発生しました。津波はありませんが，余震が立て続いています。自分のクラスではどんなことが起きそうですか？自クラスの子供たちの顔と名前を思い浮かべながら，具体的に挙げてください。

学年ごとにグループワーク5分。その後，全体で共有

## 『発災時の児童生徒理解ワーク』の利点

### ■ 「想定外」を想定内へ

- 児童生徒を理解している担任や複数教員による多角的な視点を全体に共有することで，学校としての想定外を低減できる

### ■ 防災を安全担当だけのタスクにしない

- 現実的に地震は全員に対して起きる。全教職員が発災時について考える時間を持つことで，災害を「自分のこと化」できる

### ■ 既存の時間でできる

- 生徒指導主事・生徒指導主任と協力して，毎月の児童生徒理解・状況共有の時間を活用して実施できる

## 地域・施設・人の脆弱性を踏まえた訓練をしているか

### ■ 過去に高確率で起きていること:

- 余震(科学的には100%起きる)
- 停電・校内放送の停止
- けがが人・体調不良者の発生

訓練では  
起きないこと  
になっている

### ■ 過去に一度も起きていないこと:

- 耐震化された学校の倒壊

起きること  
にしている

避難訓練は「校庭に行くことが目的」になっていないか  
安全を確保できる場所をもっと知っていく訓練として  
教室内待機バージョンもやってみよう

※津波浸水域以外

## 具体的な訓練改善事例 (余震あり・停電あり)

- 余震ありを導入
- 停電ありを導入

## 訓練の事前指導

- 教室内待機の周知
  - 学校校舎は倒壊したことはないと伝える
  - 照明や内壁が落ちる可能性があるので、机の下に入ることを伝える
- 大地震のときは、必ず余震が立て続くことを伝える
  - 余震のたびに机の下に入れば大丈夫
  - 余震が何回になるかは誰もわからない
- 緊急地震速報の報知音について伝える
  - わざわざ嫌な気持ちになるように作ってある
  - 怖いけど、みんなを守るための音
- 抜き打ち訓練にこだわらない。意義のある事前指導をする。

## 余震あり・教室内待機の訓練

### 余震が発生，教室内で点呼して終了

1. 事前指導
2. 本震を示す緊急地震速報の報知音を鳴らす
3. 余震を示す緊急地震速報の報知音を数回鳴らす
  - ・ (教職員同士は、何回鳴らすかあらかじめ示し合わせてOK)
4. 児童生徒は報知音のたびに机の下に入る
5. 校庭に集合せずに、教室内で点呼して終了
  - ・ 管理職が集計に来る/学年で廊下で集計する, など

### ※ 教員の声掛けの例:

- ・ 「ケガしている人はいませんか」「周りの人も大丈夫ですか」
- ・ 「余震来たらまた机の下に入ってくださいね」

## 余震・停電・教室内待機の訓練

### 本震や余震の後、他クラスの先生と安否確認

1. 事前指導
  - ・ 停電想定なので先生たちは廊下で大声で安否確認する旨を伝えておく
  - ・ 他クラスに助けに行くこともあるが、担任不在でも余震の時には机の下に入るように伝える
2. 本震・余震を示す緊急地震速報の報知音を鳴らす
3. 廊下に出て「〇年〇組、無事です！」など情報共有する
4. 安否情報を本部に伝える
  - ・ 管理職が集計に来る／学年で廊下で集計する／その場でどの先生が行くかを合議して本部に伝えに行く、など

## 教室内待機バージョンの「不都合な真実」

- 教員も子供も全員教室にいる

### → 教職員どうしの意思疎通はどうやる？

- 誰が管理職に報告に行くのか？
- 管理職が確認に来るのか？
- 教員は教室を離れていいのか？
- そもそも休み時間だったら...？

## 訓練の振り返り（必ずやる）

- 振り返りは、「自分の感じ方がどう変化したか」を子供たち自身が気づく機会。「こんなふうに感じられる自分になった！」と自覚して、自分の人間的な成長に気づくことができる機会。
- 「みんなで助かるために、どうしたらいいでしょう？」など問いかける
- ポイント：
  - うまくできなかったとしてもOK. 本番までに課題が見つかったことが素晴らしい。
  - 次の訓練の時や本番の時のためあてが見つければそれでよい
  - 先生ご自身の課題や次回の目標を伝える

## 情報伝達の重要性

※ひとまず教室内待機を想定してください

- 発災直後の本部（臨時本部）の機能
- 本部に伝えるべき情報
- 本部への情報伝達経路とその方法

## 発災直後の学校全体の状況

### 教室で起きること

- 子供たちが泣き叫ぶ
- 余震が立て続く
- 教室内のものが散乱する
- 水槽・照明などが破損する
- 悲鳴や鳴咽で指示が通らない
- 整列や校庭避難ができない
- 管理職(本部)からの指示が来ない

### 本部で起きること

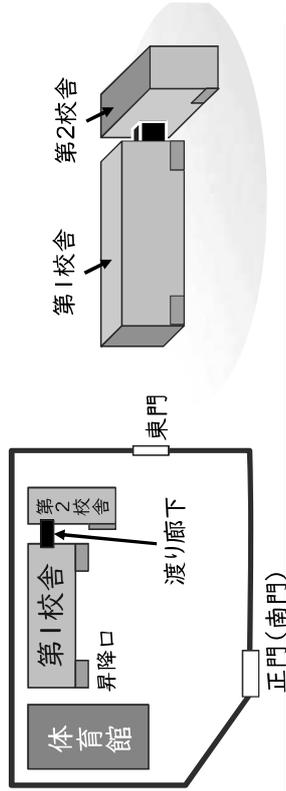
- 放送が入らない
- 教室内のような音がわからない
- 職員室・校長室のものが散乱
- 額や照明が落下・ガラスが散乱
- 地震の情報もわからない
- 保護者や地域住民が来校

## 教室と本部をつなぐ「情報」をいかに伝えるか

## 『本部ワーク』で疑似体験してみよう

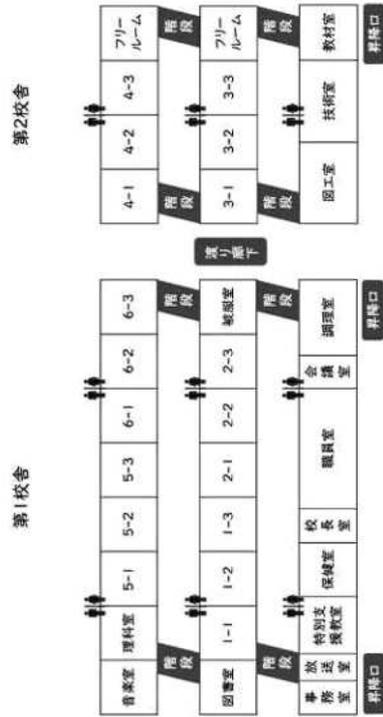
### 「原則、教室内待機で本部に情報伝達」の場合

- あなたは桜小学校の教員です。
- 桜小学校は各学年3クラスで、以下のような校舎です。
- あなたは今年度担任を持っています。
- 校長室にいる時に地震が発生し、本部要員となりました。



## 『本部ワーク』で疑似体験してみよう

### ■ 教室配置図



## 本部で教員の報告を記録

- 今から4分ほどの音源を流します。最初に緊急地震速報が鳴るので、全員机の下に入ってください。
- 「報知音+ゴォオ音」約20秒が終わると、ガヤガヤとした雑音が1分間続きます。この間に机の下から出てきて、グループメンバーと共に本部員として準備をしてください。(本部は校長室)
- 1分間のガヤガヤ音の後、足音が出て、教員が次々とやってきます。教室の状況を言うので、その内容や指示内容を記録してください。記録には、机上にあるものを活用していただいて構いません。
- 登場人物(担任)は3名
  - 1年担任(女)
  - 3年担任(男)
  - 6年担任(女)

